歴史に遊ぶ ▶⑦

日本人らしさの源流を求めて

笑い上手の民族

〝再生の心〟託し

「天の岩戸」の神々も陽気だった

■『がばい…』の魔力

「これ、面白いぞ」

関西大社会学部の木村洋二教授が友人から、ある本を薦められたのは2年前のことだ。『がばいばあちゃんの笑顔で生きんしゃい!』(徳間文庫)。元漫才師の島田洋七氏が、育ての親だった祖母の思い出を綴った2冊目の本である。

「セピア色の世界が広がっていて、その中で失敗してもあっけらかんとしていられる人が描かれている。これは哲学だと思いましたね」

とりわけ脳裏に残ったのは以下のエピソードだ。

〈中学生になった島田少年が、通知表を見せながら小さな声で言う。

「1とか2ばかりでごめんね」

ばあちゃんが顔を見返して言う。「何、言うとる。大丈夫、大丈夫。足したら、5になる」

「え? 通知表って、足してもいいの?」

「人生は、総合力」〉

「視点を変えてみる」というのは、ばあちゃんの得意技だった…で始まるくだりも、がばいばあちゃんの本領発揮である。古くなって止まり、永遠に2時を指し続けるイギリス製時計を捨てずにうそぶく。「2時にはピタッと合っている。毎日、2回は合っているから、2回見れば大丈夫」。

木村教授は早速、『がばい…』を笑いの総合科学ゼミの教材にした。学生たちの寄せた感想文がまた、興味深かった。

〈初めて1冊の本を読み切った。夢中になって電車を乗り過ごした〉

〈私の本棚に生涯置いておこうと思う本です〉

予想以上の反応の理由を木村教授はこう分析する。

「ユーモアや笑いは価値観の転倒から始まる。朝ご飯がない朝に催促されて泣き言を言うのではなく、『昨日、食べただろう』と切り返す視点。何もないことが面白みに変わり、笑いになる。しかし、苦境を笑って命の波動に変えるおばあちゃんの知恵、日本人の知恵がないがしろにされ、若者たちに伝わっていない。学生たちはそれに気が付いたのだと思います」

■「感謝の笑い」奉納

日本には、笑いを神に奉納する儀式が800年以上前から存在する。山口県防府市の小俣八幡宮の「笑い講」だ。現在は12月の第1日曜日、氏子の講員17人の代表が集まり、競い合うように3度ずつ大笑いする。最初は今年の豊作への感謝、2度目は来年の豊作の祈願、最後は今年の苦難を忘れるための笑いである。最後はその場にいる全員が大笑を三唱する。

「笑いそのものを奉納する儀式は世界でも稀有だと思う」と、金城学院大人間科学部の森下伸也教授は話す。

さらに古い、神への感謝の笑いは日本最古の神社の1つ、熱田神宮(名古屋)の笑"酔"人神事で、686年起源と伝えられる。これは神官全員が暗闇の神前で円陣になり、各自が隠し持った神面を中啓で軽くたたき、その度に「オホッ」という声を発した後、下手に笛を吹いて全員が高笑いするというものだ。熱田大神のご神体、草薙の神剣が朝廷から返還された時の喜びを今日に伝えるものとされる。

「2つの神事はいずれも、笑いが神に対する感謝の表現になっている。凶事を遮断し、幸運を招来する力を笑いそのものに見る笑門来福思想という共通点があります ね」

日本最古の書物、古事記にはすでに笑いの効用が書かれている。森下教授は指摘する。岩穴に隠れてしまった太陽神・天照大神を引き戻すために1人の女神が裸踊りをするという「天の岩戸開き」神話である。神がかりの裸踊りを見た神々が大笑いし、それが天照大神の興味をそそって岩穴から呼び戻せたという内容だ。

「こんな神話を持つぐらいだから、日本人は実にあっけらかんとした、陽気な笑い上手の民族だと思いますね。笑うことはよいこと、福を招くということが信仰になっていたと言っていい」

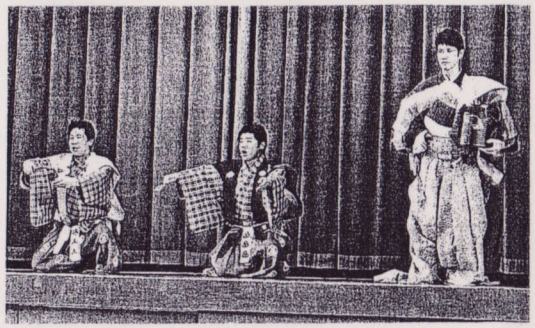
その日本人が次第に笑わなくなる。兆候が読み取れるのが仏像だ、と森下教授は考える。

「飛鳥仏は基本が笑顔、微笑みです。世界で一番笑っている像だと思う。ところが天平時代あたりから笑わなくなるんです。仏像が再び笑うようになるのは、江戸時代の円空のものあたりからです」

面白いのはその江戸時代である。笑話集、落語、春画と、庶民文化には笑いが欠かせない要素になっていた。「浮世絵も春画の一面が強かった。性の笑いは天の岩戸神話以来、日本人にはなじみの深いものですから」。一方で、笑いを忌む人々が現れたと森下教授は言う。武士道を掲げ始めた武家階級である。「武士は3年に1度片ほおを崩すというぐらい、白い歯を見せることを嫌いました。組織とか道とかやかましく言い出したからでしょうね」

やがて江戸時代が終わり、富国強兵、殖産興業を国是に掲げた明治政府が、精神的支柱にしたのが神話だった。「義務教育、徴兵制、工場勤務。みんな欧米列強に追いつけ追い越せで、生真面目さや効率を求めるものばかり。そのためには武士をモデルにするのが一番よかったんでしょう」

かくて日本人は笑いに低評価しかしなくなり、再生の効用まで忘れたのではないか、というのが森下説である。



日本を代表する喜劇・狂言。室町時代から笑いを紡いでいる(茂山千五郎家の「附子」)

現代を代表する笑い芸、漫才、落語はいずれも宗教を起源としている。

漫才のルーツは尾張万歳、三河万歳などとして今も伝わる万歳。基本形は太夫と才蔵という2人の演者が「めでたい尽し」の決まり文句を節をつけて掛け合う言祝ぎ芸である。めでたいことを言い続けていればその通りになるという言霊信仰に基づく予祝芸とされる。

落語のルーツは仏教と言われる。外来宗教である仏教を説教するために、節をつけて語った節談説教から講談や浪花節が生まれ、落語も生まれた。

落語の祖とされるのは京都・誓願寺の僧、安楽庵策伝で、最後にオチがくる笑話のスタイルを確立し、笑話集『醒睡笑』にまとめた。街中で大衆相手に話をして金をもらうプロの落語家スタイルを京都で始め、落語家の祖になったのも元日蓮宗の僧侶、露の五郎兵衛だった。<『笑いの花咲く国へ』(森下伸也著)から>

ドン・キホーテの像と記念撮影する木村教授。「ピン・ラーディン」と自己紹介しながら笑いの検証を行うという =旅行先のスペイン

三井寺金堂に安置されている円空の善女龍王像。いずれも笑んでなごやかな表情だ =大津市

■「笑いの文化」復権を

日本人が歴史的に笑いを重視した理由を、木村教授は「リスタート(再起動)する力を与えるから」と考える。その根拠の1つが、指導学生が阪神大震災の被災者から集めたジョーク集『名言集』だ。その中にこんな話がある。

被災者が集まった場で1人が尋ねる。「お宅はどうやったん?」。被災状況の質問だ。1人が「うちは貴乃花や」と答えた。その時の大相撲で、横綱は好調に白星を連ねていた。つまり「全焼(全勝)だ」というわけである。居合わせた全員が笑った。

「笑うとジェット噴射のように心が後ろか高くに飛び、自分の姿も含めて全体の状況が客観的に見えるようになるんだと思う。一時ではあっても重荷を降ろすことができる。そして原点から生きようという気になる。人生を初期化する力が笑いにはあるんだと思います」

木村教授が唱える「笑いの統一理論」によると、笑いには「ズレて」「ハズレて」「ヌケて」「アフレる」4段階があるという。

「私は関大のピン・ラーディンです」

木村教授が多用する自己紹介である。言った後、相手の反応を確かめる。大学教授とテロリスト…というミスマッチに「ズレ」が生まれ、相手の脳に生じる。常識や固定観念が「ハズレて」笑っていいかどうかの混乱が生まれる。「母いも悪いもなくなるニュートラルな状態です」。やがて、大学教授の権威などが「ヌケて」空っぽになり、ヌケたものが脳の笑い中枢に「アフレて」笑いを生む。その過程を確認するのである。

この確認作業のために今年2月、「笑い測定器」なるものを完成した。本心から笑った時のみ横隔膜が振動すること に着目し、専用ソフトを入れたパソコンと筋電計などをつないだもので、検出した笑いの度合いを「aH(アッハ)」という独自単位で表示する。

「日本史ほど笑いをポジティブにとらえた文化は世界にないと思う。今流行の生きる力を養うためにも笑いの再評価を訴えていきたいと思います」

教授たちが訴えるのは、「先祖返りのすすめ」でもある。

(安本寿久)

<毎月第4日曜日に掲載します>

笑い測定器の実験風景。横隔膜の振動から笑いの数値を測定する =今年2月20日、関西大